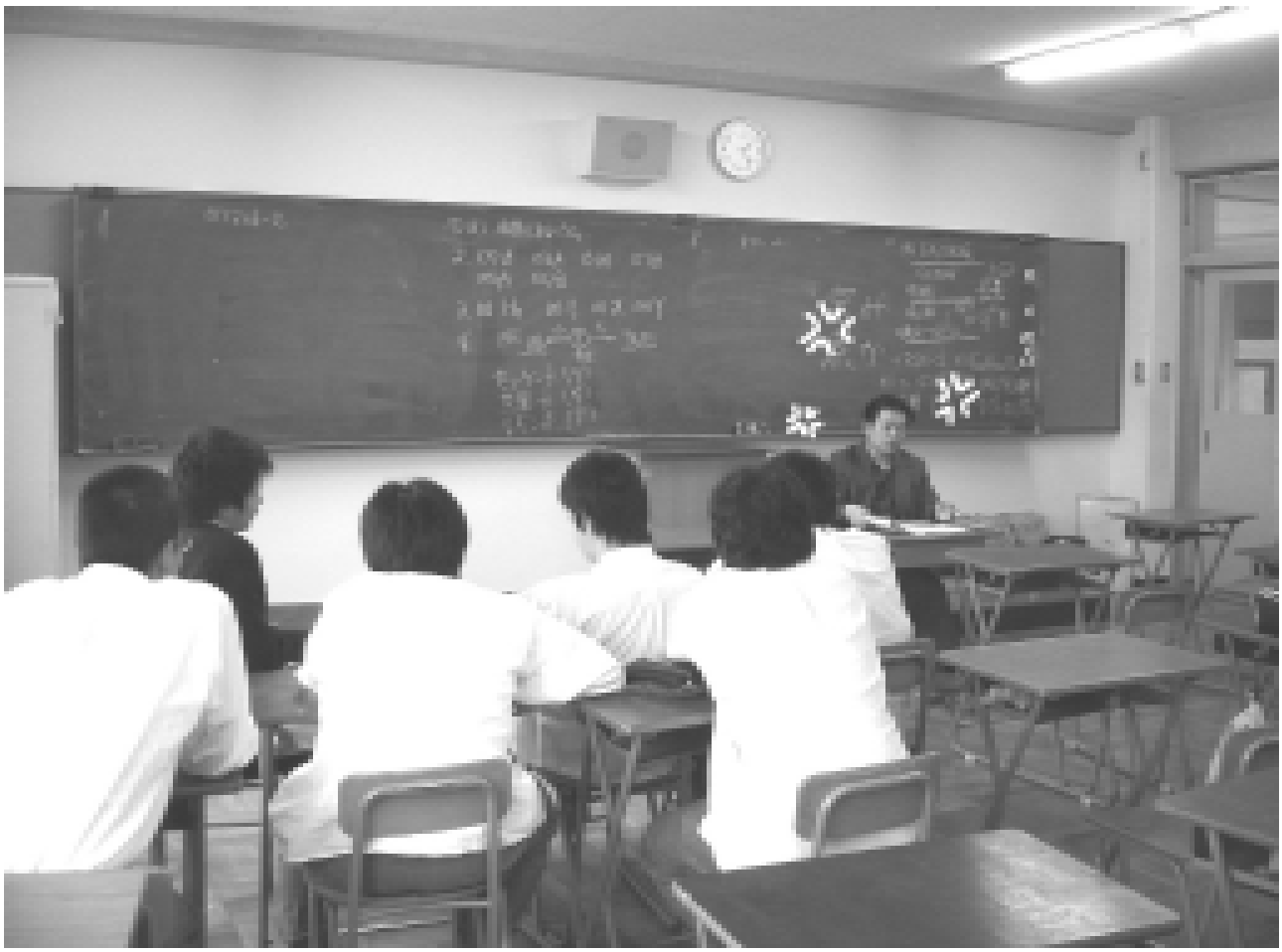
Osaka University Knowledge Archive

Title	「若さと老い」
Author(s)	西川, 勝
Citation	臨床哲学のメチエ. 2003, 11, p. 32-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9451
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University



10月8日
六時間目
若さと老い　　西川

「若さと老い」

西川　勝

平成14年10月8日（火）
テーマ：中年看護師が語る「若さと老い」
目的：介護老人保健施設で高齢者ケアに携わる看護師の視点から、「若さと老い」について語ることで、受講する高校生の自己観念に揺さぶりをかけてみたい。
教材：「考える本のはなし10」（住宅顕信の句集『未完成』に関する書評エッセイ、西川の文章、メディカ出版　Neonatal Care 2002 vol.15 no.10 54-55頁）

上記内容で、福井高校での授業を行った。当初の予定では、痴呆老人ケアの話もする予定であったが取りやめた。その理由は、当日の高校生の授業態度に腹を立てたぼくが、話をする気を失ってしまったからである。ぼくは、職場の同僚である介護福祉士の重信さんと二人で授業を計画したのだが、重信さんが何日もかけて練った「寝返りの援助」という実習授業をまったく真面目に受けようとしない彼・彼女たちを見て、ぼくはまさに「**ぶちきれ**」の状態になってしまっていたのだ。実習ベッドに勝手に寝転がり、奇声を上げたり、生徒同士がふざけあう。授業中も、肩から鞄を下ろそうともせず、携帯電話をもてあそぶ姿。講師の話なんか聞く素振りすらみせずに雑談する連中に、怒鳴りつけたくなるのを

押さえて、視線をきつくするだけで辛抱していたのだが、怒りで自分の口の中がカラカラになっていくのが止められなかった。５０分の授業がむやみに長かった。

授業の後、「どうして、生徒に注意しなかったんだ」と、重信さんに八つ当たりするほど、ぼくの攻撃性は高まっていた。

ぼくは、授業で開口一番「**君、喧嘩を売られたことがあるか**」と問いかけ、のらくら返事する男子生徒に向かって「ぼくは、今、そんな気分なんだよ」と睨み付ける。教室の雰囲気が気まずく凍り始める。「**ざまあみろ。お前たちの好きなようには、させないぞ**」と思った。とにかく、授業中の私語は禁止した。すぐに何人かが机にうつ伏せになった。途中、何度か、寝た振りしてる生徒のところへ行き起こしてみるが、わざとらしい寝ぼけ顔でこちらを見て、特に反抗するでもない無気力な様子に、心底、こっちのやる気は失せた。彼らの作戦勝ちというところだろう。殴って起こすわけにもいかないので、怒気を含んだ声で授業を続けるしかなかった。どんな風に話したのかは、正直言って、もう覚えていない。ただ、住宅顕信という25歳で不遇のうちに夭折した自由律の俳人の話で、若さの栄光と惨めさを伝えようとした。顕信の句を少し紹介する。

「鬼とは私のことか豆がまかれる」

「ずぶぬれて犬ころ」

「若さとはこんな淋しい春なのか」

「捨てられた人形がみせたからくり」

若さに特有の反抗、虚栄と傲慢、自意識。

燃えさかる炎とならずとも、せめて火花を散らす覚悟が、君たちにはないのか。ぼくは、本当に腹が立っていた。

授業の最後にこう言い捨てた。「若さについて語る中年であるぼくは、決して君たちと対等でありたくもないし、理解されたいとも思わなかった。**こんな出会いもあるんだ、ということだけは覚えておきなさい**」

大人に反抗していたはずの自分が、若さに反抗している。ぼくも立派な中年になった。

しかし、久しぶりに憤激した時間を手に入れることができた。感謝してますよ。福井高校の諸君。（にしかわまさる　介護老人保健施設ニューライアフガラシア　看護師）